

北海道支部第 21 回学習会  
「音楽のロシア語 2」  
(2011 年 1 月 22 日於札幌)

北川 和美

久し振りに雪の北海道に行ってきた。別の用事で行ったのだが、ちょうど北海道支部で開催された学習会にも参加できた。東京にいと、休日に仕事以外で外出するのは難しく、学習会や映画会にもほとんど参加できずにいるのだけれど、地方に行ってしまうと身軽なのが嬉しい。おまけにテーマは音楽！

狭い会場に集まった参加者は、老若男女 26 名。主に札幌圏のロシア語関係者だが、英語と韓国語の通訳者も各 1 名、大学生 1 名、その他行政、マスコミ、銀行、教育関係者なども。札幌を離れてほぼ 17 年になる私が挨拶できるのは数人で少々寂しいが、確実に若い世代が育っていることを心強く思う。

講師の中川速男氏は、札幌の中学の音楽の先生とロシア民謡やロマンスを歌うコンサート歌手の二足のわらじを履き、2008 年 2 月のユジノ・サハリンスクを含め、これまで 10 回もロシアへ演奏ツアーに行った本格派で、学習会は、途中休憩をはさみ、三部構成（第 1 部は音楽用語解説、第 2 部はロシア国歌の変遷、そして第 3 部はロシアのロマンスのギター弾き語り）で 3 時間にわたって行われた。

第 1 部の音楽用語解説では、露和、和露の翻訳通訳で注意を要する単語と、楽器とそれに関連した単語を、楽譜や写真などの豊富な資料付きで丁寧に解説。Концертмейстер にはオーケストラのコンマスの他に、オペラやバレエなどの練習で指揮者の助手をするピアノ奏者やコンサート本番のピアノ伴奏者の意味もあることを、初めて知ったのは私だけ？



第 2 部はロシア国歌の変遷を、ロシア帝国時代からたどり、2000 年 12 月にできた新国歌までのメロディや歌詞を、ソ連国歌と比較しながら考えるというもので、個人的にはこれが一番面白かった。

エリザヴェータ女帝在位中(1741~62)の国歌《Боже, храни короля》にはイギリスの国歌《God save the Queen》、そして 1917 年の革命後に生まれた臨時政府(ケレンスキー政権)の国歌《Рабочая Марсельеза》にはフランス国歌「ラ・マルセイーズ」のメロディが使われていた、というのが面白い。音楽大国ロシアが、なぜ国家の威信を表す国歌によその国の国歌のメロディを拝借しなければならなかったのかは大なる疑問だが、当時のロシアには国歌を作曲できるような優れた作曲家がたまたまいなかったのだろうか(確かにこの二つの国歌が作られた時代はチャイコフスキーもムソルグスキーも格林カもこの世にいない)？

それと並んで興味深いのが、国歌に歌われた政治指導者の名前が消えるプロセスで、1944年版ソ連邦国歌にはスターリンとレーニンの名があるが、1977年版ではスターリンの名は消えてレーニンだけが残り、2000年版ロシア国歌には、当然ながらもう誰の名も出てこない。56年かかってやっとロシアも、栄枯盛衰の激しい政治指導者の名を国歌の歌詞に入れるとその後情勢が変わった時面倒くさいということを学んだ、ということなのか？

また、1956年フルシチョフ政権下のスターリン批判の中で歌詞が廃され曲のみが演奏されたり、1993年、グリンカの「愛国の歌」を基礎に作られたメロディを憲法で新生ロシアの国歌と定めたが歌詞は無かった、といった“歌詞なし曲のみ演奏”の時代が計27年もあり、外国からメロディを借りてきたり歌詞が変わったり曲だけになったり新たに作られたり…と、「君が代」一筋の日本と違ってまことに目まぐるしい。

とにかく、歌詞や楽譜を含め計25頁の分厚い資料をもとに熱く語られたロシア国歌変遷論は、論文や学会発表のテーマに十分なりうる充実した内容だった。

そして第3部はお待ちかねの、ロシアのロマンスのギター弾き語り。ツルゲーネフ作詞《Утро туманное》やレールモントフ作詞《Выхожу один я на дорогу》など5曲を解説、ロシア語の歌詞と日本語訳朗読をした上で2時間半の講義の後とは思えないような歌声で披露して下さった。



たっぷり勉強し、歌も楽しんだ3時間。歌やロシア語の発音が上手なのはもちろん、MCもとても面白くて引き込まれた。「こんな先生に音楽を習ったら、きっと音楽好きになるだろう。札幌の中学生は幸せだなあ」と羨ましくなった。氏作成の豊富な講義資料に加え、大島剛氏作成の音楽や舞台芸術関連の用語集も貰えて、とってもお得な学習会だった。

その後、場所を変えて新年会も行われ、講師の中川氏を含め13名の参加があったとのこと。中川氏と主催者の皆さんに感謝しつつ、しばし芸術に触れ豊かな気持ちになって雪の札幌を後にした。